

IV-243

『教育施設を含む地域環境創造におけるランドスケープデザインの手法研究』

(株) ジオスケープ 正 員 ○村田 郁生
 (株) ジオスケープ 正 員 須田 清隆
 (株) ジオスケープ 菅谷 彰

1. はじめに

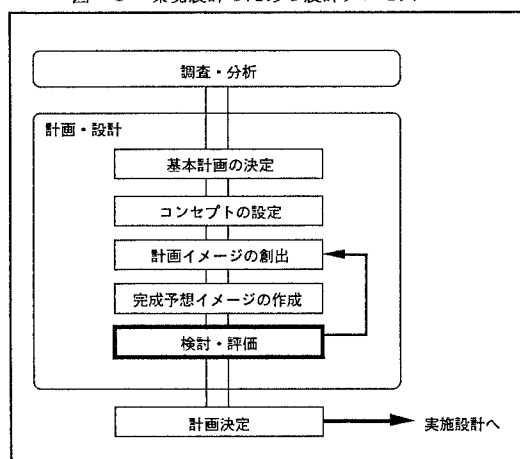
教育空間における空間特性は、今日の様々な学校制度の在り方と共に大きく変貌しつつある。昨今の教育改革の流れの中で、生徒の個性を尊重した教育、創造性豊かな教育環境など、これまでの画一化し形骸化した教育環境からの脱却を図るために、各地で様々な試みがなされている。このような試みが進む中で、教育施設と周辺環境との共生により、より多くの人と生徒が交流しあうことができる豊かな環境を創造する方法が求められている。

2. 研究概要

(1) 研究目的

本研究は、設計プロセスにおいて必要不可欠な合意形成の手法として、CG（コンピュータグラフィックス）を用いたイメージの共有作業の在り方を検討し、設計プロセス（図-1）において有効な手法を見い出すことを目的とする。

図-1 環境設計のための設計プロセス



(2) 調査内容

調査内容は、学校新設に伴う完成予想CGの各視点場における数種のパターンをもとに、学校関係者（生徒、教師）および非関係者の2通りの集団に対

し、SD法による調査を行った。学校関係者への調査後、フリーディスカッション形式で各イメージに対する要望を聞き取り調査した。

アンケートに用いたCGは、施設内にアプローチするための歩道を含んだアプローチ道路空間、エントランス広場、中央広場空間、水辺空間、裏門空間（ゲート、歩道）などの主要な学校空間を取り上げた。（表-1）また、2次元のCGの中で具体的なスケール感と機能の把握がしやすいよう、人物などの点景を合成した。（図-2,3）

視点名	空間名	パターン
視点1	エントランスアプローチ空間1	A, B, C
視点2	エントランス広場空間	A, B, C, D
視点3	エントランスアプローチ空間2	A, B, C
視点4	中央広場空間1	A, B, C, D, E
視点5	中央広場空間2	A, B, C, D, E, F
視点6	水辺空間	A, B, C, D, E, F
視点7	裏門空間	A, B, C, D, E, F

表-1 調査視点場一覧

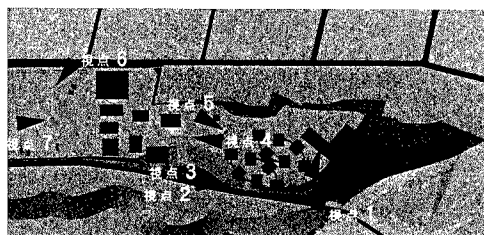


図-2 視点場設定

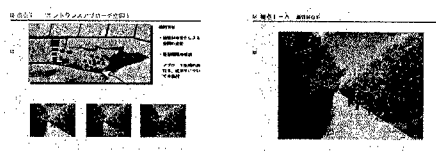


図-3 検討パターン例

(3) 調査方法

調査方法は、学校関係者、非関係者の2集団に対してアンケート調査を行い、両集団のアンケート結果の特性分布を比較した。

学校関係者でのアンケートは、学生30名、関係者6名の合計36名で行った。この際、各視点場に

キーワード : CG, 合意形成, 設計プロセス, 環境共生

連絡先 : 〒107 東京都港区北青山2-5-8 ハザマビル14F

(株) ジオスケープ tel/03-5410-2366 fax/03-5410-2367

おけるパタンの画像を順次見せ、好ましいと思われるイメージに対し集計した。複数回答を認めたことにより、集計数と実際の合計人数は必ずしも一致しない。集計後、それぞれのイメージに対する意見を求め、イメージの中に不足している要素、希望事項について順次意見を求めた。一部の視点場において、意見聴取後、再度集計した。

非関係者へのアンケートは、男女27人に対して行った。こちらのアンケートでは、あらかじめイメージ言語を複数用意し（表-2）、この言語に最も合致すると思われる視点ごとのイメージパターンを瞬間的に選定するという方法をとった。ここで用いたイメージ言語は、肯定的イメージ（良いイメージ）に限定したため、最終的に選択数が多かったパターンがより好ましいイメージであることになる。

開放的な、単調でない
自然な、親しみのある
素朴な、落ち着いたある
柔らかい、飽きのこない

表-2 言語イメージ

3. 調査結果

調査結果として、右記のような割合の結果（グラフ-1）が得られた。左側の列が学校関係者、右側が非関係者から得られた結果である。

4. 考察

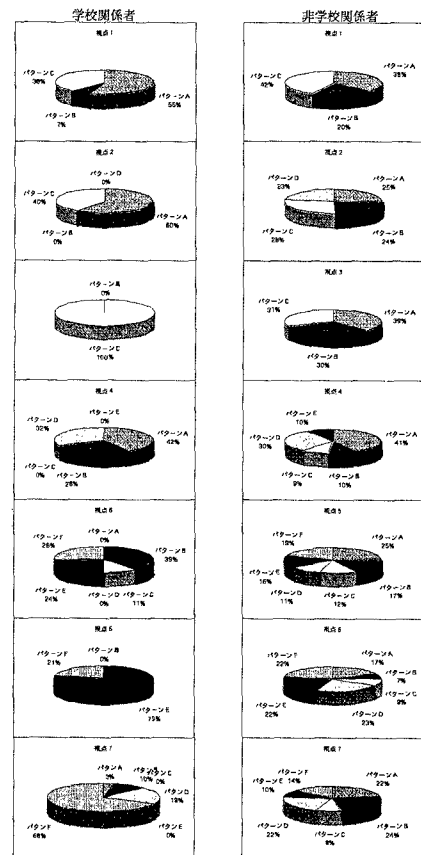
前記の結果から、関係者と非関係者とでは、集計結果に大幅な相違が認められた。このような結果が生じた理由として考えられる事項は、

1. 被験者の関心度の相違
2. 生活環境の相違
3. 事前に与えられた情報量の相違
（イメージに対する説明）
4. 議論の有無
5. 年齢差（学生⇔社会人）
6. アンケートの聞き取り方法の違い

等が挙げられる。

今回の調査では、異なる調査環境下での調査による結果の相違点を明確にするため、あえて条件を統一することなく調査を行ったが、調査結果に大幅な相違が検出されたことから、不特定多数の被験者に回数を分けて調査を行う場合、条件設定によって、調査結果が大幅に変化してしまう可能性があることが確認された。

グラフ-1 調査結果



2. まとめ

本研究では合意形成の手法としてCGを用いたが、同一のCGを使用した場合においても画像イメージ以外の条件設定が事なる場合、調査結果に大幅な相違が生ずることが確認された。

今後、ランドスケープデザイン分野において合意形成のためのCGによるプレゼンテーションがより一般化し、共生的地域環境創造において必要不可欠な要素になると思われるが、客観的な合意形成の道具としてCGを用いる場合の条件設定の確立が望まれる。また、CGによるコミュニケーションのための事前条件としてどのような検討事項が必要となるか、またその実証的検証が必要となる。

【参考文献】

大崎・須田・宮崎：景観設計における景観評価法の一考案
土木学会第49回年次学術講演会